

7月6日(日) マルコの福音書9章17～19節

「ああ、不信仰な時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。」(19節)

16節で「あなたがたは弟子たちと何を論じ合っているのですか。」とお尋ねになるイエス様に、群衆の一人が答えて「口をきけなくする霊につかれた私の息子を、あなたのところに連れて来ました。」(17節)そして、その症状は「その霊が息子にとりつくと、ところかまわず倒します。息子は泡を吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせます」(18節)というものでした。「それであなたのお弟子たちに、霊を追い出してくださいとお願いしたのですが、できませんでした。」と説明したのです。息子の父親は、イエス様。あなたのところへ連れて来たのだということを語っているように思われます。しかしイエス様が不在なので、弟子たちに頼んだけれども彼らにはできなかったということで、そこにはイエスの不在に対する苛立ちと、弟子たちに対する不満や怒りなど、さまざまな思いを読み取ることができます。それに対してイエス様は「ああ、不信仰な時代だ。いつまで、あなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。」と嘆かれたのです。ここでイエス様が問題にしているのは、弟子たちの不信仰であり、息子を連れて来た父親の不信仰であり、回りにいた群衆の不信仰でした。信仰は謙遜においてこそ現れるものです。弟子たちであれば、自分たちにはできないけれども、イエス様ならみわざをなしてくださるとの謙遜さを欠いており、自分たちで口をきけなくする霊を追い出そうとしてうまくいかなかったのです。父親と群衆も、自分たちは、この苦しんでいる息子を前にして何もできないことを認めて、謙遜にイエス様の助けを祈り願い求めようとはしませんでした。それと同時に、病が癒されたり、霊を追い出していただいて満足するのではなく、また自分たちにとって都合の良いメシアに仕立てあげるのではなく、謙遜になりイエス様がどなたかを知ろうとすることが全くなかったということです。そのような信仰に欠けた態度がイエス様を嘆かせました。イエス様は私たちを見て、相変わらず「不信仰な時代だ」と嘆かれることはないでしょうか。イエス様は、私たちの信仰をどのように見ておられるでしょうか。また、多くの人々が自分ではどうすることもできないような状況に直面することがあり、教会に助けを求めて来られることがあります。その時に私たちが自分で何とかしようとして、人々を失望させてしまうことはないでしょうか。私たちは、敬虔そうにしている自分を人に見せるのではなく、神を指し示しながら、自分にはできないことが神にはできると常に信じなければなりませんし、問題を抱えて教会に来られた方々にも神への信仰を持つように導かなければなりません。自分で何とかしようとしてどうすることもできず、せっかく教会に来られた方々を失望して去らせて、イエス様を「ああ不信仰な時代だ。」と嘆かせるようなことがあってはならないのです。問題なのは、自分自身が無力なことではありません。主に助けを求めようとしない私どもの不遜さなのです。

7月7日（月）マルコの福音書9章20～27節

「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」（23節）

「その子をわたしのところに連れて来なさい。」（19節）と言われたので、人々がその子をイエス様のところへ連れてまいりますと、霊がすぐ彼に引きつけを起こさせたので、彼は地面に倒れ、泡を吹きながら、転げ回りました。しかも22節では「霊は息子を殺そうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。」と述べていますように、幼い時から、いつ死ぬか分からないというような状況で、子ども本人もつらかったでしょうし、それを見ているしかできない親も、どれほどつらかったらうかと思えます。子どもを自分のところに連れて来るように命じたことも含め、イエス様は、この苦しんでいる子と親の両方を深くあわれまれたことでしょう。そのような中で、イエス様の前に出た父親は、「しかし、おできになるなら、私たちがあわれんでお助けください。」と言いました。（22節）この父親は、弟子たちが霊を追い出すことができなかつたので、イエス様に対する信仰も薄くなってしまったのかもしれませんが。しかしイエスはこの父親に対して「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」とその信仰を励まそうとしてくださいました。それに対して父親は「信じます。不信仰な私をお助けください。」と言いました。この父親は、霊につかれた息子に関して、問題なのは息子にとりついた霊でも、息子を治せなかつたお弟子さんたちでもなく、不信仰な自分自身だということに気がついて、彼は「息子をいやしてください。」ではなく「不信仰な私をあわれんでください。」とイエス様に願ったのです。私たちがさまざまな問題の中を通され、祈れども答えがまるでないような中を通されることもあります。しかし、自分ではどうにもならない問題自体が問題なのではなく、もちろん神様ご自身が無力なのではなく、不信仰な自分が一番の問題であることに気がつかなければなりません。私たちが不信仰に陥ることがあります。そのような中で生ける主は、私たちの不信仰を愛をもって叱責してくださり、自分の不信仰を悔い改めつつ、信仰を持つようにと励ましてくださるのです。主からの励ましをいただきつつ、主への信仰を問題の渦中にあっても持ち続ける私たちでありたいものです。そして、謙遜に自分の無力さを認め、神に徹底的に信頼する心を与えていただきたいと思います。そしてイエスは霊を叱ることで、この子どもから霊を追い出されました。それと同様に私たちが信仰により、主のみわざを見させていただきたいと思います。

7月8日（火）マルコの福音書9章28、29節

「この種のものは、祈りによらなければ、何によっても追い出すことができません。」（29節）

昨日見ましたように、イエス様は「信じます。不信仰な私をお助けください。」（24節）との父親の信仰に答えて、口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊を権威をもって叱ることで、この霊を追い出して、その子をいやされました。

しかし弟子たちにとっては万事解決とはいきませんでした。というのは、どうして自分たちには悪霊を追い出すことができなかつたのか不思議でならなかつたのです。イエス様は十二弟子を任命され、その時に悪霊を追い出す権威をも持たせられました。（3章13～19参照）さらにこの十二弟子たちは、汚れた霊を制する権威を授けられ、実際に悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒す」（6章13参照）みわざを行いました。ですから自分たちはイエス様からいただいた権威をもってすれば、この悪霊も追い出せるに違いないと思ったはずですが、しかし実際には追い出すことができなかつたので、彼らは不思議に思い、イエス様に「私たちが霊を追い出せなかつたのは、なぜですか。」と尋ねているのです。

その彼らの問いに対してイエス様は「この種のものは、祈りによらなければ、何によっても追い出すことができません。」と言われました。つまり彼らに欠けていたのは祈りであったということです。祈りにはさまざまな要素があります。願い、賛美、感謝、とりなしなどです。そして祈りには、すべてを神様におゆだねし、神様に全面的にお頼りするという面があります。まさに神への信仰が必要なのです。それは、祈りが神の御前に謙遜になることを意味しているのです。ですから、私たちが自分でできると思ったり、自分の力を過信するならば、私たちは決して神に祈りません。私たちの祈りとは、そういうものです。そう考えますと、この弟子たちには、自分たちで悪霊を追い出せるとの自信があり、傲慢になっていた可能性があります。それにより神のみわざがこの弟子たちを通してなされることを妨げていたのです。神は喜んで私たちを通してみわざをなしたいと思っておられるにもかかわらず、私たちが自分の力にのみ信頼し、祈ろうとしないことで、どれほど神のみわざが現れることが妨げられていることでしょうか。何かをする前に、まず主の御前にへりくだって祈りましょう。教会活動の前の準備の段階から謙遜に頭を垂れて、ともに心を合わせて主に祈りましょう。その場合に、祈らなくても準備ができてしまう慣れや知った者同士であるお互いの慣れ合いにも気をつけなければなりません。そのためにも謙遜に祈り、そして自分を通して主のみわざがなされるように、しかし、それが自らの栄光ではなく、主の栄光の現れとなるように願いましょう。

7月9日（水）マルコの福音書9章30～32節

「人の子は人々の手に引き渡され、殺される。しかし、殺されて三日後によみがえる。」
(31節)

イエス様は差し迫っているご自身の受難に関して、人を避けて個人的に弟子たちに教えようとされました。イエス様が弟子たちに教えられた「人の子は人々の手に引き渡され、殺される。しかし、殺されて三日後によみがえる」というのは、すべて父なる神様がみこころによって計画されていたことでした。イエス様は、ただその父なる神様のみこころに従い通されたのです。しかし父なる神様は結果的にこのことを通して、ご自身の栄光と勝利を現されたのです。時の権力者は、イエス様を殺すことにより自分たちの思いを遂げたと考えたことでしょう。しかしイエス様が死からよみがえられたことにより全人類の罪と死に対する勝利が完成したのです。これこそまさに父なる神様の願われていたことであり、イエス様の従順な服従によってそれが成し遂げられ、まさにイエス様は、私たちの模範となりました。同じように、主は私たちの人生にも計画を持っておられます。そして、私たちがイエス様のように、神のみこころに従って歩む時に、私たちを通して必ず主はご自身の栄光を現してくださいます。私たちを通して主の栄光が現れることを常に願っているのでしょうか。

「しかし弟子たちは、このみことばが理解できなかった」(32節)とされています。これは決して知的な理解のことを言っているのではないはずです。むしろ弟子たちには自分たちが思い描いていたメシヤ像があつて(他のユダヤ人と同じようなものであつたと考えられますが)それに合わないことをイエス様が言われたので理解できなかったのです。ですから理解できなかったというよりも、むしろ信じられなかったと言うべきかもしれません。そして彼らは、以前にペテロがイエス様から「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」(8章33節)とされたので、イエス様に尋ねるのを恐れたのです。私たちも、聖書を読んだり、みことばを聞く時に、素直にそれを受け入れることができないことがあるかもしれません。しかし、それは結局、自分の考えや思いに合わないのので、受け入れられないだけではないのでしょうか。素直に神様からのメッセージを常に聞ける信仰者でありたいと願います。

7月10日(木) マルコの福音書9章33～37節

「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい。」(35節)

イエス様は、家に入って後、個人的に弟子たちに「道で何を論じ合っていたのですか」と尋ねられました。もちろんイエス様は、弟子たちが話していた内容をご存知でした。ですからそのように弟子たちに話しかけることによって、弟子たちにその問題について気づかせ、そしてイエス様ご自身の考えを話そうとされたのです。そのイエス様の問いに弟子たちは答えず、黙っていました。だれが一番偉いかと論じ合っていて、答えるのが恥ずかしかったからでしょう。そして彼らもそのようなことを話すのは、無意味で愚かなことだとは思っていても、どうしてもそのような思いが彼らのうちに出て来たのです。その原因は、彼らがイエス様の弟子として歩み出したにもかかわらず、彼らは依然としてこれまでの価値観で歩んでいたからです。地位や身分の問題は、ユダヤ人社会においては非常に重要な問題でした。その価値観をイエス様に従い始めた後もずっと持っていたのです。それでイエス様の言われていることが理解できなかつたり、イエス様から叱責されることになったのです。

35節でイエス様は、弟子として歩む上で大切なことを教えられました。それは「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい。」ということです。イエス様がメシヤ(救い主)としてこの地上に来られたのは、全人類の贖いとなるためでした。それと同時に、イエス様ご自身が仕える者となり、仕えることの意味を教えるためでもありました。イエス様は父なる神様にお仕えになり、そして十字架の上でいのちをお捨てになるほどに、徹底的に仕えられたのです。そして回りの人々にお仕えになり、人々の幸いのために自らをささげ、愛を示され、そして最後には救いのためにいのちをささげて、全人類に仕える者となられました。私たちもイエス様にならうべきです。私たちは常に主なる神様にお仕えすべきです。そして回りにいる兄弟姉妹たちにも仕えるべきです。御国の特徴の一つが、互いに仕え合うということです。ですから、御国の民として生きる私たちも、皆の後になり、皆に仕える者として生きるべきです。

そして37節で弟子たちに対して、具体的な行動として、幼子たちのひとりをご自身の名によって受け入れることを求められました。この当時、幼子は無価値の代表のような存在でした。そのように見られていた幼子を自分たちの中に受け入れて、交わりをし、世話をするというのは、彼らの常識からすると考えられないことだったでしょう。だからこそイエス様は「わたしの名のゆえに」と言われたのです。イエス様の名によって、回りから取るに足らない存在と見られていた幼子を受け入れるのです。私たち自身もイエス様の名によって、受け入れるべき方はいらっしゃるのでしょうか。また私たちの価値観や考えとは異なったとしても、イエス様の名によってなすべきことはないのでしょうか。「イエスの名によって」私たちが何かをすることをイエス様はみこころとされ、私たちに望んでおられるのです。

7月11日（金）マルコの福音書9章38～41節

「あなたがたがキリストに属する者だということで、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。」（41節）

38節でヨハネが「先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようと思いました。その人が私たちについて来なかったからです。」と報告しています。これは、恐らく12弟子以外にもイエス様の弟子たちがいて、彼らは彼らなりに福音の宣教を行っていたのかもしれませんが。そして、このことは、イエスの御名にこそ力があることを証ししています。ヨハネは、直接イエスに従っていないことを問題視したのかもしれませんが、自分たちはイエスにつき従っているがゆえのプライドもあったことでしょう。イエス様は、39節で「やめさせることはいけません。わたしの名を唱えて力あるわざを行い、そのすぐ後に、わたしを悪く言える人はいません。」と言われました。つまりイエス様の名を唱えて、何かのわざを行った後で、イエス様のことを悪く言うならばそれは明らかな矛盾となってしまうからです。むしろ、イエス様は、ご自分の御名を通してみわざがなされ、そこに神の栄光が現れることを喜ばれたのです。

それに続けてイエス様は「わたしたちに反対しない人は、わたしたちの味方です。」と言われ、その例として41節で「あなたがたがキリストに属する者だということで、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。」と言われました。水を手に入れることが容易ではないこの時代の中東の地域で、旅人に水を与えることは最大の歓迎のしるしでありました。特に、その歓迎の理由が「キリストに属する者」ということに注目しましょう。誰かをキリストに属する者として受け入れるということは、キリストを受け入れるということであり、さらにはキリストをメシヤ（救い主）として遣わされた父なる神をも受け入れることになるということです。そしてそのように、キリストに属する者を受け入れるということは、その人のうちにすでに神が働いてくださっているということを意味しています。なぜなら罪人は本来光であるキリストを受け入れず（ヨハネの福音書1章9節）同じようにキリストに属する者をも受け入れないからです。ですから、キリストに属する者を受け入れること、またキリストご自身を受け入れることは、まさに神の驚くべきみわざの現れであり、そのような人々の行為を神ご自身も見ておられて、報いてくださるということです。

罪の世にあって、人々がイエス様を受け入れず、キリストに属する者たちを受け入れないのは驚くことではないでしょう。そして、そのような人たちに対して私たちは説得をすることはできませんが、神の驚くべきみわざを通して主が人の心を大きく開いてくださることがあります。主は、そのようにして常にみわざをなしてくださることを信じましょう。

7月12日(土) マルコの福音書9章42～50節

「また、わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまづかせる者は、むしろ、大きな石臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれてしまうほうがよいのです。」(42節)

イエス様の関心は常に「小さい者たち」と呼ばれている人々にありました。37節ではひとりの子どもを自分の名によって受け入れる者はイエス様ご自身を受け入れるのだとも言われています。42節で「わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにもつまづきを与えるような者」と言われていますが、ここで言われている「小さい者たち」とは、低い社会階層の人たちやイエス様を信じ始めた人を指しています。また「つまづき」というのは何となく分りにくい表現ですが、罪を犯すように人を導くとか、人に信仰を捨てさせるようなことをすることを意味しています。そしてこのような人々は厳しいさばきが神から与えられると言われています。それは「ゲヘナの消えない火に投げ込まれる」ことであり、そのゲヘナとは「彼らを食らううじ虫が尽きることがなく、火も消えることがありません。」(48節)と言われているような場所なのです。その神のさばきの恐ろしさをイエス様ご自身もご存知だけに、「もし、あなたの手があなたをつまづかせるなら、それを切り捨てなさい。」(43節)「もし、あなたの足があなたをつまづかせるなら、それを切り捨てなさい。」(45節)「もし、あなたの目があなたをつまづかせるなら、それをえぐり出しなさい。」(47節)と極端とも思える例えを用いて、自らがつまづきを引き起こさないように警戒を与えているのです。なぜ手、足、目が、小さい者たちに対するつまづきとなるのでしょうか。それは、私たちのそれぞれの体の器官が主のみこころに従って用いられないからです。手は、本来神と人にと仕えるために用いられるべきですが、人の物を奪ったり、人を傷つけることに用いられる可能性があります。足は、教会での礼拝、奉仕、交わりに行ったり、福音を伝えるために用いられるべきですが、自分の欲や快楽を満たすところに行くために用いられる可能性もあります。目は神のみことばを読み、人への愛を示すため、その人の必要に気づくために用いられるべきですが、自分の欲を満たし、自分に慕わしい物を見るためだけに用いられることがあります。このように主のみこころではなく、自分のために体の各器官を用いようとするなら、私たちは人につまづきを与える者となってしまいます。絶対に罪を犯さないとか、絶対に人につまづきを与えないということはできませんが、そのように罪を犯すことを避けるとか、人につまづきを与えるようなことを避けることはできます。それは、私たちがみことばに親しみ、聞くだけでなく、それに従って行動することです。私たち一人一人が、そして教会全体が、みことばを基準として歩むことを心がけたいと思わされます。

49節でイエス様は「人はみな、火によって塩けがつけられます。」と言われました。ここは、非常に解釈の難しい箇所だと言われていますが、妥当な解釈としては、火は試練や苦難を指していると考えられますが、どのような状況に置かれることがあっても、信仰をもって喜んで主に従っていく中であって、クリスチャン一人一人は塩けのある者へと変えられていくのです。そして私たちが心にとめておきたいことは、塩けは何かをだめにするために用いられるのではなく、食品などを保存するために用いるということです。そして、そのような塩けのあるクリスチャンこそが神様にとっても、クリスチャンの交わりにおいても、社会においても、本当の意味で塩けのある役に立つ存在となっていくのです。ですから主なる神様も私たちの信仰をなくすためにではなく、ただ単に苦しめるためではなく、必要な塩けを私たちに与えるために、試練や苦難をお与えになることもあるのです。そのようにして私たちも「自分自身のうちに塩けを保つ」(50節)存在でありたいと思わされます。